

# 1 序 章

## 1 調査の経緯

1985年8月7日、橿原市は同市上飛驒町73-1番地ほかについて、小集落地区改良事業にともなう住宅建設工事に原因する事前発掘調査の通知書を文化庁に提出した。造成工事の着手時期は同年11月の予定であったが、申請地が市営日高山団地建替工事にともなう残土置場にあてられたこともあり、発掘調査着手の時期が未定のまま8カ月が経過した。ところが1986年4月に至り、当事業を担当する橿原市飛驒地区改良事務所は、年度内の早期着工を決定した。そこで、奈良県教育委員会、橿原市教育委員会、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部等で協議を重ねた結果、当調査部が発掘調査を担当することになったのである。

しかし、調査部では1986年度の発掘計画を決定した直後で、すでに予定どおり調査が進行中であった。そのため取扱いは困難を極めたのであるが、年度計画の一部修正をはかりつつ6月に発掘に着手することとした。調査は、藤原京右京七条一坊発掘調査会（代表、松井住春）と橿原市長との間で発掘調査の委託契約が締結され、発掘調査会の委嘱を受けて当調査部が実施した。

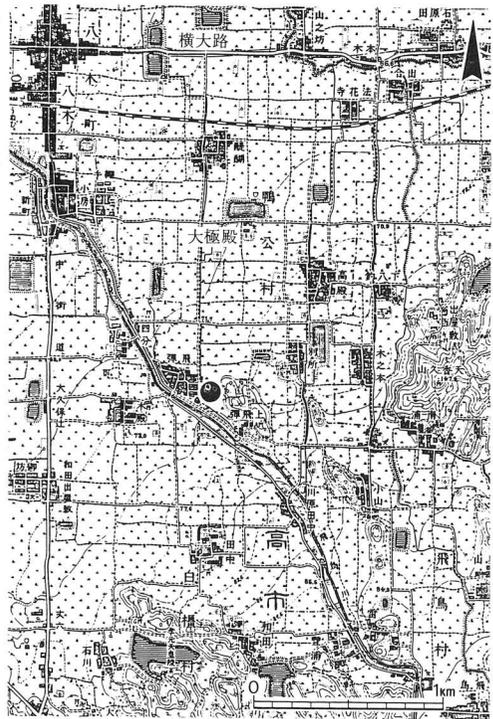
## 2 位置

調査地は藤原宮の南面中門から南西へ300m、藤原宮の南に横たわる日高山丘陵の西麓から西へ約70mの位置にある。一带は南東から北西へ向ってゆるやかに傾斜する地形であり、調査地の南方100mのところには飛鳥川が南東から北西へ流れており、この場所は飛鳥川右岸の低地に位置している（第1図）。

盛土以前の地形は条里で区画された水田であり、条里の呼称でいえば、高市郡路東二十七条二里十一坪の中央部にあたる。また岸俊男氏による藤原京の条坊制復原説によれば、右京七条一坊の西南坪にあたり、奈良国立文化財研究所が設定した遺跡の地区割りでは、6AWH-P・Q地区に含まれる。

## 3 既往の調査

日高山の周辺では、1975年以来、橿原市が市営住宅の建設や小集落地区改良事業にともなう宅地造成工事等の事業を進め、当調査部では、それらの工事にともなう事前調査を数

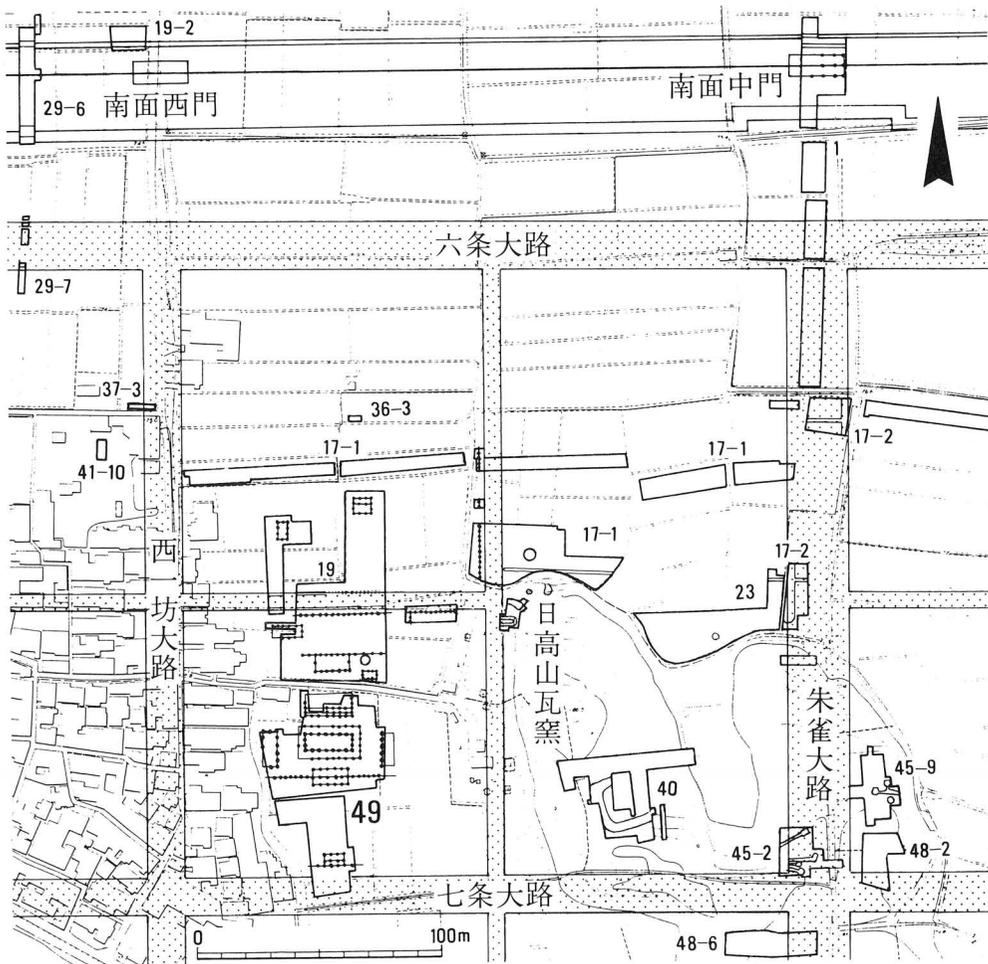


第1図 1908年(明治41)の調査地周辺

次にわたり実施してきた。それらの発掘成果については『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』6・7・14～16等で報告してある。おもな成果は以下のとおりである（第2図）。

まず、朱雀大路と七条条間路を確認し、藤原京条坊道路の実態の解明が大きく前進した点あげられる。朱雀大路は、宮南面中門の南150mの地点での発掘成果によると、路面幅19m、東西両側溝の幅5mで、側溝心々間の距離は24mである。他の大路の側溝心々間の距離が9mと15mとであるのにくらべ、より幅広い京中央大路としての性格をうかがいえた（第17-2・23次調査）。

この地点の南にひかえた日高山丘陵については、市営日高山団地建替工事にともなう事前調査を何度かおこなっているが、丘陵頂部は近年における削平が著しく、朱雀大路の遺構そのものを確認するには至っていない。しかし、朱雀大路の推定位置では、日高山の北から湾入する谷を埋め立てた大規模な整地の跡を確認しており、これは朱雀大路の敷設にともなう整地地業である可能性の大きいことが判明している（第45-2・48-6次調査）。



第2図 調査地周辺の地形と条坊 数字は調査次数

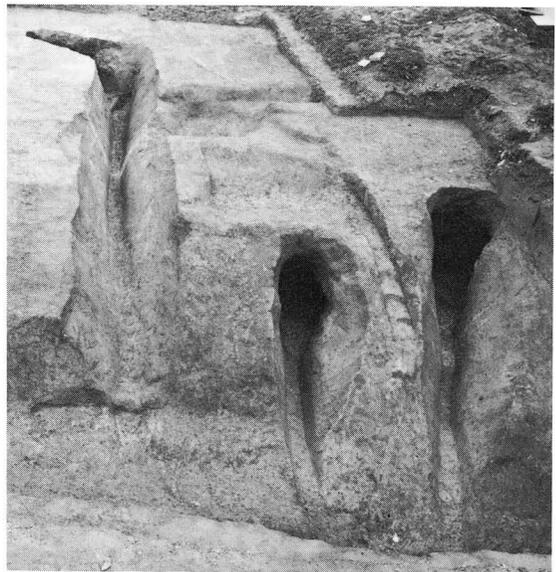
坊内の利用状況に関しては、坊を東西に二分する南北掘立柱塀と、この塀以西の場所で七条条間路を検出したことによって、坊の西半部が西北坪と西南坪との二区画に分けられていたことが判明した（第17-1・19次調査）。これに対して、東半部の東北坪と東南坪とでは、七条条間路など、坪の間を区画する施設はない。これは二つの坪を一体で利用したためと理解することもできるが、日高山丘陵が東南坪のほぼ全域を占めていることとも大きく関連していよう。

日高山丘陵では、その北斜面から西斜面にかけて、藤原宮所用の瓦を焼いた瓦窯が計4基確認されている。登窯の1号窯と平窯の2号窯とがならんで検出されており、二種の構造の窯が並存することが知られている<sup>1</sup>。一方、丘陵のすぐ北に続く低地、すなわち、東北坪の南部では、鋳銅関係の炉址や井戸などが検出されている（第17-1次調査）。東北坪と東南坪は藤原宮の南に接する京内でも一等地にあたるが、ここには、造瓦工房を含めて藤原宮の造営工事に直接関わる様々の工房が設けられていた可能性が強いのである。

また、日高山丘陵の北端から、藤原宮の南面中門に至る一帯では多量の円筒埴輪や形象埴輪が発見されており、これは、京・宮の造営に際して、日高山丘陵上にあった古墳を削平し、その墳丘の盛土などを使って、一帯を整地したことに起因すると考えられてきた。そして1984年には、舌状にのびる二つの尾根のうち、西側の尾根の頂部で、墳丘をほぼ削平された5世紀中葉造営の方墳が発見されて、この想定の正しいことが裏づけられたのである（第40次調査）。そのほか、6世紀前半代の埴輪や6世紀後半の須恵器なども出土しており、なお多くの古墳が藤原京・宮の造営工事によって消滅した状況がうかがわれる。

さらにまた、最近では東側尾根の西斜面、つまり、二つの尾根を分ける谷の奥で6世紀後半の横穴墓4基（第45-2次調査）、東側尾根の頂部に近い東斜面で7世紀前半から中葉にかけての横穴墓4基を発見する成果があった（第45-9・48-2次調査）。

西斜面で検出した横穴墓群は、前述した朱雀大路の造成地業の直下において、その造成工事に着手する直前に内部を発見し、遺体と副葬品とを取り除くという注目すべき事実が判明した（第3図）。これは藤原京の造営工事の際に見つかった横穴墓を改葬した跡と理解され、それはまさに『日本書紀』持統7年（693）2月10日条に見える「造京司衣縫王等に詔して、掘せる戸ほりいだを収めしむかばね」の命令が忠実に実行されたことを示すものといえよう。



第3図 第45-2次調査検出の横穴墓 西から

第19次調査では西北坪と西南坪の一部を調査し、藤原京の遺構（B期）と、それに先だつ7世紀後半の遺構（A期）を検出したが、ここでは、今回の調査と密接な関係のある藤原京の遺構について簡単に説明しておく（第1表、第4図）。

西北坪は発掘面積が狭く、第17-1次調査で検出した坪の東限の南北塀SA1855と、小規模な建物SB2035・2040を検出したにとどまる。西南坪は坪中央部の北部を一部発掘した程度であるが、建物群を規則的に配置する坪利用の実態を解明する重要な手がかりが得られている。すなわち、坪の北を七条条間路SF2031に並行して設けた東西塀SA2029によって画し、区画の内部では、坪を東西に二分する中軸線上に建つ6間×3間の大規模な建物SB2000を中心に、周辺に小規模な建物や井戸を配置する構成が判明したのである。

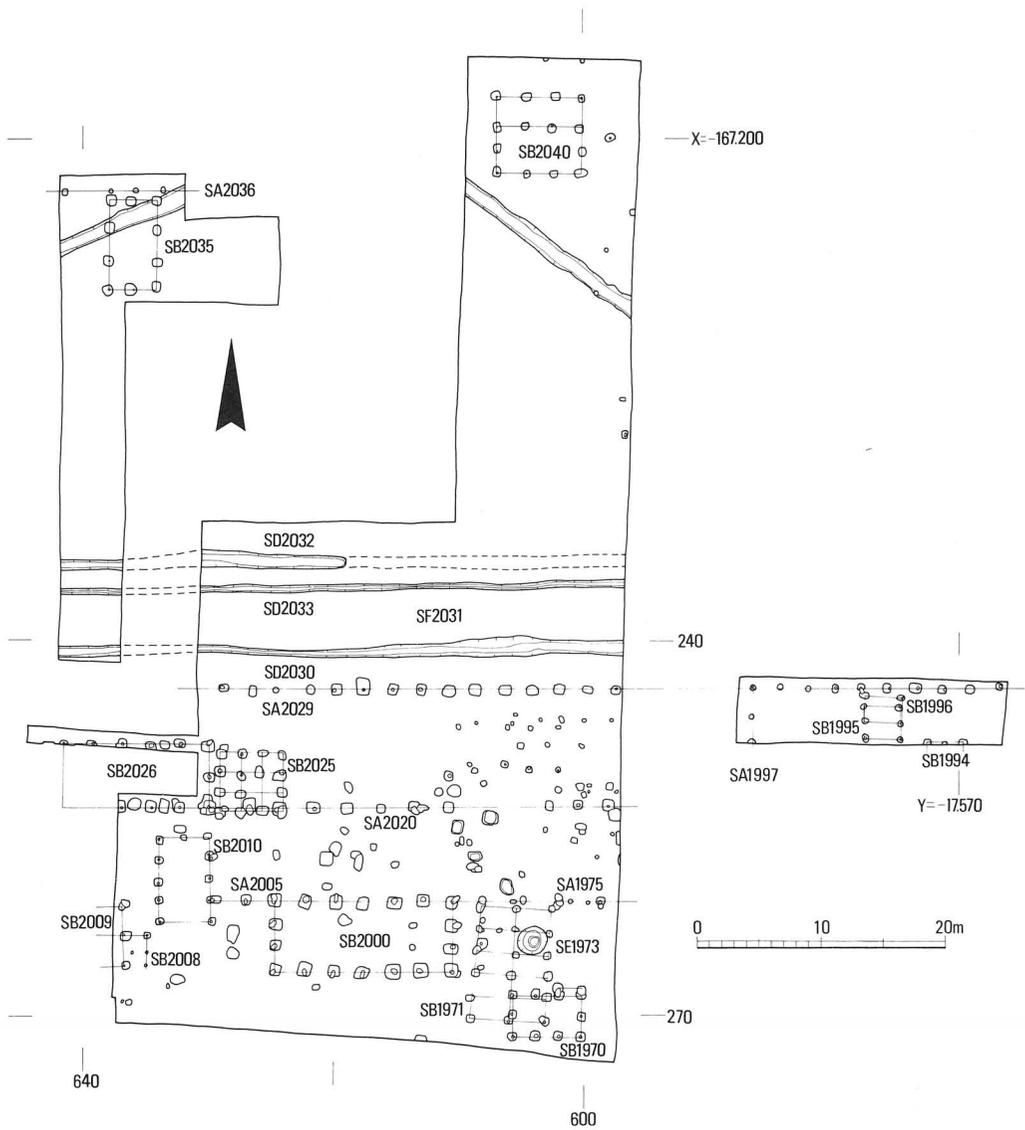
また、坪の内部は数条の塀によって、いくつかのブロックに細分されていたとみられる。ことに、前述の大規模建物の北側柱に取りつく東西塀SA1975・2005と、中軸線から東へ31mの位置にある南北塀SA1997によって、坪内は内郭と外郭とに分けられていた可能性がある。このことは西南坪が一体で使われていたことを示唆し、さらにまた、SB2000の南方にあたる坪の中央部に、主要建物群の存在を予想させたのである。

これまでの藤原京内の発掘は、条坊地割の基本計画の解明に重点をおかねばならず、条坊道路に囲まれた坊や坪内の利用状況に関しては、これを明らかにできるほど調査が進んでいないのが実情であった。今回の調査地は、藤原京での坪利用の実態を解明する重要な地域と認識し、その発掘成果を大いに期待したのである。

- 1 網干善教「橿原市飛驒町日高山瓦窯」『奈良県文化財調査報告書—埋蔵文化財編』第5集,1962.  
奈良国立文化財研究所編『藤原京右京七条一坊調査概報』1978.

時期	遺構番号	種類	規模 / 庇	桁行 m	梁行 m	庇 m	備考
A期	SB1971	南北棟	5×2	9.0	6.0		総柱 SB1970・SA1975より古
	SB1995	東西棟	1×1	2.9	2.7		SA2029より古
	SB1996	東西棟	1×1	3.0	2.0		
	SB2008	?	?	?	?		
	SB2009	東西棟	?×2	?	4.8		
	SB2010	南北棟	4×2	6.8	4.0		SA2005より古
	SA2020	東西塀	14以上	38.0以上			SB2025・2026より古
	SA2036	東西塀	4以上	8.0以上			西北坪
B1期	SB1970	東西棟	3×2	5.4	3.3		SB1971より新
	SA1975	東西塀	4以上	9.6以上			SB2000の東にとりつく
	SB1994	南北棟	?×2	?	3.0		
	SA1997	南北塀	2以上	4.4以上			SA2029にとりつく
	SB2000	東西棟	6×3	14.4	5.7		
	SA2005	東西塀	2	5.9			SB2000の西にとりつく
	SB2026	東西棟	5×2	11.6	5.0		SA2020より新
	SA2029	東西塀	28以上	62.5以上			
	SB2035	南北棟	3×2	7.2	3.8		西北坪
SB2040	東西棟	3×2 北	6.9	3.6	2.4	西北坪	
B2期	SB2025	東西棟	3×3	5.1	4.5		総柱 SA2020より新

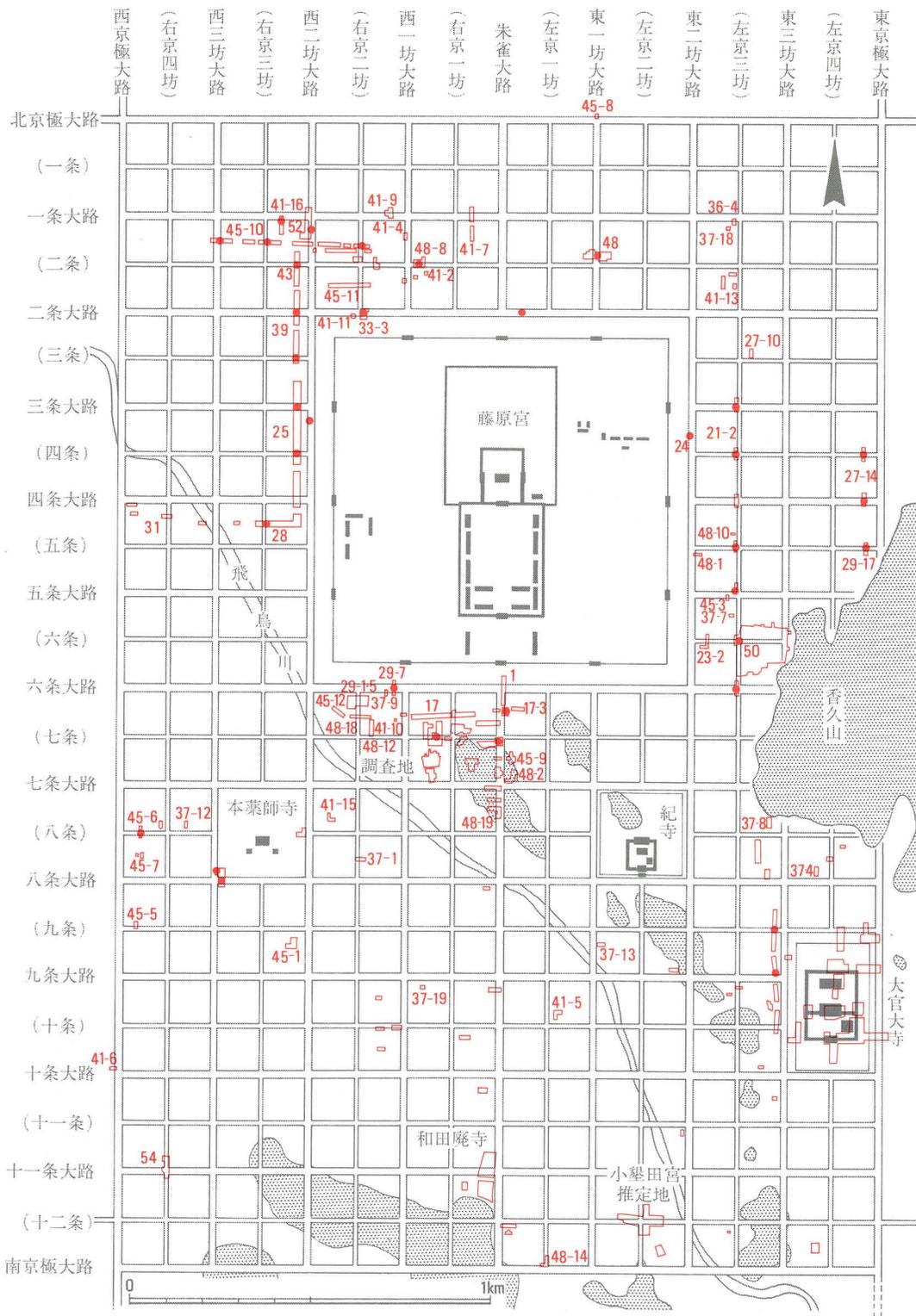
第1表 第19次調査 建物・塀規模一覧



第4図 第19次調査区遺構配置図 1/600



第5図 第19次調査区南半全景と今回調査地 北から



第6図 藤原京条坊復原模式図 数字は調査次数 ●は条坊関連遺構検出地点